

毒草

江戸川乱歩

青空文庫

よく晴れた秋の一日であった。仲のよい友達が訪ねて来て、一しきり話はずんだあとで、「気持ちのいい天気じゃないか。どうだ、そこいらを少し歩こうか」ということになって、私とその友達とは、私の家は場末ばすえにあつたので、近くの広っぱへと散歩に出掛けたことであつた。

雑草の生い茂つた広っぱには、昼間でも秋の虫がチロチロと鳴いていた。草の中をしゃくばかりの小川が流れていたりした。所々には小高い丘もあつた。私達とはある丘の中腹に腰をおろして、一点の雲もなくすみ渡つている空を眺めたり、あるい或は又、すぐ足の下に流れている、溝みぞの様な小川や、その岸に生えている様々の、見れば見る程、無数の種類の、小さい雑草を眺めたり、そして「アア秋だなあ」とため息をついて見たり、長い間一つ所にじつとしていたものである。

すると、ふと私は、やはり小川の岸のじめじめした所に生えていた、ひとむら一叢のある植物に気がついたのである。

「君、あれ何だか知っているか」

そう友達に聞いて見ると、彼は、一体自然の風物などには興味を持たぬ男だったので、

無愛想に、「知らない」と答えたばかりであった。が、如何に草花の嫌いな彼も、この植物丈だけには、きつと興味を持つに相違ない訳があった。いや、自然を顧かえりみない様な男に限つて、この植物の持つ、ある凄味すこみには、一層惹ひきつけられる筈はずだった。そこで、私は、私の珍しい知識を誇る意味もあつて、その植物の用途について説明を初めたものである。

「それは×××××とってね、どこにでも生えているものだ。別に烈はげしい毒草という訳でもない。普通の人は、ただこうした草花だと思つている。注意もしない。ところが、この植物は墮胎だたいの妙薬なんだよ。今の様に色々な薬品のない時分の墮胎薬といえ、もうこれに極つていたものだ。よく昔の産婆なんか、秘法のおろし薬として用いたのは、つまりこの草なんだよ」

それを聞くと、私の友達は案あんの定じよう、大いに好奇心を起したものである。そして、一体全体、それはどういう方法で用いるのだと、甚はなはだ熱心に聞き訊きするのであつた。私は「さては、早速さつそく入用いりようがあると見えるね」などとからかいながら、お喋りしゃべりにも、その詳敷くわしい方法を説明したのである。

「これをね、手の平の幅だけ折り取るのだ。そして皮をむいて、そいつを……」
と、身振り入りで、そういう秘密がかったことは、話す方でも又面白いものだ、フンフ

ンと感心して聞いている友達の顔を眺め眺め、こまごまと説明したのである。

それから、その墮胎談がきつかけになつて、私達の話は産児制限問題に移つて行つた。その点では友達も私も、近頃の若い者のことだ。無論話が合つた。制限論者なのだ。ただそれが誤用されて、不必要な有産階級に行われ、無産社会には、そんな運動の起つていないのを知らぬ者が多い、現にこの近所には貧民窟ひんみんくつの様な長屋があるのだが、そこではどの家も必要以上に子福者こぶくしやばかりだ、という様なことを大いに論じたものである。

それを論じながら、計らずも私の頭に浮んで来たのは、私の家のすぐ裏に住んでいる老郵便配達夫一家であつた。その主人はこの町の三等郵便局に十何年勤続して、月給僅わずかに五拾円じゆうえん、盆暮れの手当てが各々おのおの二拾円にじゆうえんに充たないという身の上であつた。その中で晩酌ばんしやくを欠かした事のない酒好きではあつたけれど、極めて律義者で、十何年という長ながの月日を、恐らく一日も欠勤せずに通した様な男であつた。それで年は五十を越しているらしいのだが、結婚がおそかつたものと見えて、十二歳を上あに六人の子宝(?)があるのだ。屋賃だつて拾円は払わねばなるまい。それをまあどうして暮して行こうというのだ。夕方になるとは、十二歳の長女が大切相たいじそうに五合瓶ごがうびんを抱えて、老父の晩酌ばんしやくを買いに行く。私の家の二階から、その哀れな姿が毎日眺められるのだ。夜は、乳離れちばなの三歳になる男の

子が、病的な（恐らく嬰兒えいじのヒステリーであろうか）力のない声で、一晚中泣き続ける。五歳になるその上の女の子は、頭から顔から腫物おできが出来て、夜になるとそれが痛いのか痒いのか、これも又ヒステリーの様に泣き叫ぶのだ。四十歳の彼等の母親は、それをまあどんな心持で眺めているのであろう。しかも彼女の腹には、もう又、五月の子が宿っているのだ。だが、これは私の裏の郵便脚きやくふ夫の家に限ったことではない、その隣にも、その裏にも、似た様な子福者がいくらもある。そして、広い世間には、もつともつと、郵便脚夫の十層倍も不幸な家庭が、沢山たくさんあることであらう。

そんなことを、取止めもなく話合っている内に、短い秋の日がもう暮れ初めたのである。青かった空が薄墨色になり、近所の家々には白茶けた燈火が点じられ、そうして土の上に腰をおろしているのが、妙にうそ寒くなつて来た。そこで、私達は立上つて、私は私の家に、友達はその家に、帰ることにしたのである。が、その時、ツト立上つた私は、今迄まで中を向けていた丘の上に、何かの気けはいを感じて、何気なく振り向くと、そこには、夕ゆうや暗みの空を背景にして、木像の様に一人の女がつつ立っていたのである。一刹那いつせつな、私の目には、背景が空ばかりだった為ためか、それが、非常に大きな異形いぎようのものに見えた。併しか、次の刹那には、それは、物ものの怪けなどよりはもつと恐しいものであることが分つた。という

のは、そこに化石した様に、つつ立っていたのは、今云った私の裏の哀れな郵便配達夫のはらみ女房だったからである。

私は顔の筋肉が硬こわばった様になつて、無論挨拶あいさつなんか出来なかつた。先方でも、空くうど洞うの様なまなざしで、あらぬ方ほうを見つめていて、私の方など見向きもしなかつた。この無智な四十女はいうまでもなく、さつきからの私達の話わを、すっかり聞いていたのだ。

私達は逃げる様にして家に向つた。私も友達も、妙に黙り込んで、分れの言葉もろろく交さなかつた。二人は、殊ことに私は、思わぬ女の立聞きに、そしてその結果の想像に、すっかりおびやかされていた。

一旦家に帰つた私は、考えれば考える程、あの女房の様子が気になり出した。彼女はきつと始めから、例の植物の用途の説明の所から聞いていたに相違ない。私はあの時、その植物を用いる時は、どんなにやすやすと、少しの苦痛もなく墮胎を行うことが出来るかについて、可也かなり誇張的な説明をした筈である。それを聞いて、子福者のはらみ女は、そもそも何を考えるのが自然であるか。その子供を産む為には、苦しい中から幾千いくちかの費用を支出しなければならぬ。もう老境に近い年で、生れた子供を懐ふところに、三歳の子を背中に、そうして洗濯をし、炊事を働かねばならぬ。今でさえ每晚極つた様に怒鳴どなり散らす亭主は、余

計に怒鳴る様になるだろう。五歳の娘は、ますますヒステリイをひどくするだろう。それらの数々の苦痛が、たった一本の名もない植物によって、少しの危険もなく除かれるとしたら。……彼女はそんな風に考えないであろうか。

何が怖いのだ。お前は産児制限論者ではなかったのか。あの女房がお前の教えに従って、不用な一人の命を、暗から暗へ葬ったとて、それがどうして罪悪になるのだ。私は理窟ではそんな風に考えることが出来た。併し、理窟で、この身震いがどう止まるものぞ。私はただ、恐しい殺人罪でも犯した様に、無性に怖いのであった。

何だかじつとしていては悪い様な気がして、私は家の中をソワソワと歩き廻った。二階へ上って、あの広っぱの見える縁側から、薄暗い丘の辺をすかして見たり、その時、郵便脚夫の女房はもうそこには居なかった。何の必要もないのに、階段を駆けおりて、二三段も踏みはずし、馬鹿馬鹿しく騒がしい物音を立てて見たり、そそくさと下駄を引かけて、表口の格子を開けて見たり、又しめて見たり、そんなことを繰り返したあとで、結局もう一度丘の下まで行って見ないではいられなくなったのである。

私は、もう一間先は見えない程の、夕闇の中を、誰か見ていはしないかと、身のすくむ気持で、うしろの方を振り向き振り向き、例の丘の所までたどりついた。灰色のもやの中に、

一尺の小川の黒い水が、チロチロと流れていた。一間ばかり向うの草の中で、何の虫だけが、妙にさえた音で鳴きしきっていた。私は、堅くなつてあの植物を探した。それは、あたりの低い雑草の中に、化物の様に太い茎と、厚ぼつたい丸い葉を、ヌツとつき出しているの、すぐに分つたが、見ると、その一本の茎が、半ばからポツキリ折り取られて、まるで片腕なくした不具者の様に、変に淋しい姿をしているのだ。

私は、殆ど暮れ切つた闇の中で、うそ寒く立ちつくしていた。醜い顔に、いつも狂者の様に髪の毛を振り乱している、あの四十女の女房が、さつき私達の立去つたあとで、恐しい決心の為に頬を引つらせながら、ノソノソと丘を下り、四つ這いになつてその植物を折り取っている有様が、気味悪く私の目に浮んで来る。それは、何という滑稽な、然しながら又、何という敵 肅な、一つの光景であつたらう。私は余りの怖さに、ワツと叫んで、いきなり走り出したい様な氣持になつたことである。

そして、それから数日のちのこと、その間私は、可哀相な裏の女房のことは、氣にかかりながら強いて忘れる様にしていた。家人の噂話などもなるべく聞くまいとした。私は朝から家を出ては、友達の所を遊び廻つたり、芝居を見たり、寄席に這入つたり、なるべく外で夜を更していた。だが、到頭ある日、私は家の横の細い路地で、ヒョッコリと、

裏の女房に出逢つて了しまつたのである。

彼女は私を見ると、幾分恥し相にニヤニヤ笑いながら、その笑顔が私には何と物もの凄すごく見えたことであろう、挨拶をした。乱れた髪の毛の中に、病後の様にやつれた、血の気の失うせた彼女の顔が、すさまじく靦のぞいていた。私の目は、見まいとすればする程、彼女の帯の辺に行った。そして、そこには、予期していたことながら、然し矢張やはり私をハツとさせないでは置かなかつた所の、餓うえた瘦やせ犬の様に、二つに折れはしないかと思われる程の、ペチャンコのお腹があつたのである。

そして、この話にはもう少し続きがあるのだ。それから又一月ばかりたつたある日のこと、私はふと通りすがりに、一間ひつまの中で私の祖母と女中うちやとが妙な話うしをしてるのを、小耳にはさんだのである。

「流れ月なんだね。きつと」これは祖母の声である。

「まあ、御隠居様が、ほほほほ……」無論彼女の笑わらい声こゑはこんなによくはないのだが、これは女中の声である。

「だつてお前、お前がそういつたじやないか。まず郵便屋のお上かみさん」そう云つて祖母は

指をくるらしいのだ。「それから北村のお兼さん、それから駄菓子屋の、何といたつ
けね、そうそう、お類さん。そらね、この一町内で三人もあつたじゃないか。だから、流
れ月なんだよ、今月は」

それを聞いた私の心臓はどんなに軽くなったことであろう。一刹那、この世の中が、ま
るで違つた変てこなものに思われた。

「これが人生というものであつたか」何のことだか分らない、そんな言葉が私の頭に浮ん
だ。

私は、その足で玄関を下りると、もう一度例の丘の所へ行つて見ないではいられなかつ
た。

その日もよく晴れた、小春日和であつた。奥底の知れない青空を、何鳥であろう、伸
びのび々と円を描いて飛んでいた。私は少しもまごつかずに例の植物を探し出すことが出来た。
だが、これはまあ、何とということだ。その植物は、どの茎もどの茎も、皆半分位の所から
折り取られて、見るも無慙なむくろを暴っていたではないか。

それは近所のいたずら小僧共の仕業であつたかも知れない。又、そうでなかつたかも知
れない。私はいまだに何れであるかを知らないのである。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第二巻 屋根裏の散歩者」春陽堂

1926（大正15）年1月

初出：「探偵文藝」奎運社

1926（大正15）年1月

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：門田裕志

2018年3月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

毒草

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>